小栗外傳

五

ヘ 13
3293
5

門ベ13
荒3293
巻 5

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

寒燈夜話小栗外傳卷之五

東都　絳山獸醜陳人戲編

第九編

貞婦夫婿を待て節を全さ
良馬名士に逢て能を顕さ

且説其時一人の了髮出るもの。這裡に入ぶせの人と助手ぐるまを取て
おくさまの居処を誘ふ。六十餘りの老女待うけて恭しく礼を做居へ
こん忘れや志のふらめ姥ハ庄司が母あて付りぬ。何よりハ恙なく光景
なつかしなり。いざ〳〵うう喜び〳〵といへり。助重不安眷一眷ハ庄司
が母ふ差のぐれバ。大に敬ろ礼。こハそも奈何よ忘しきや此處ぬ〳〵
逢つかべ〳〵ニハと浮世ハ姥爾ふ審のふハ道理なり。是ふハ〳〵ハ縁故
あり。何をか前ふや出んと思ひまどふぞりなほが先ぜへそそろくんハ

此家の姫こそ君と許嫁なるに照天姫にておはすなる。姫君は不図も今日
君を見そめ給ひ強て此家に誘ひまゐりしと聞へ郷さまに助を再び結びし愛
にて嫗をえらびこれ。いと怪しと思ふに照天の家なりしとやらさらつく不審
晴ざりしに其故よし然ば能を稼と眉を顰めて問ければ嫗は噴嗟つゝ
語出るやう姫君此地方へ何まうりありしてより前年名武の伝家亡び
しより折から姫君の叔父君横山太郎安秀どの侍従君と姫君とを
伴ひ館を立退給ひ所々を吟呻けるが横山殿若かりし時五人の男子
を持しに没落の当時乳人に誘引行末知れざりしが。五人の男子成
人の后身のうつれ行きまゝに緑林の群に入り終に賊の大将軍となり
此地方に除ぬ居りし故安秀どのこれを知り尋ね来られて此
頼みし終に親子六人白波の棟梁して。いと豊に世を送りぬ。五人の男子

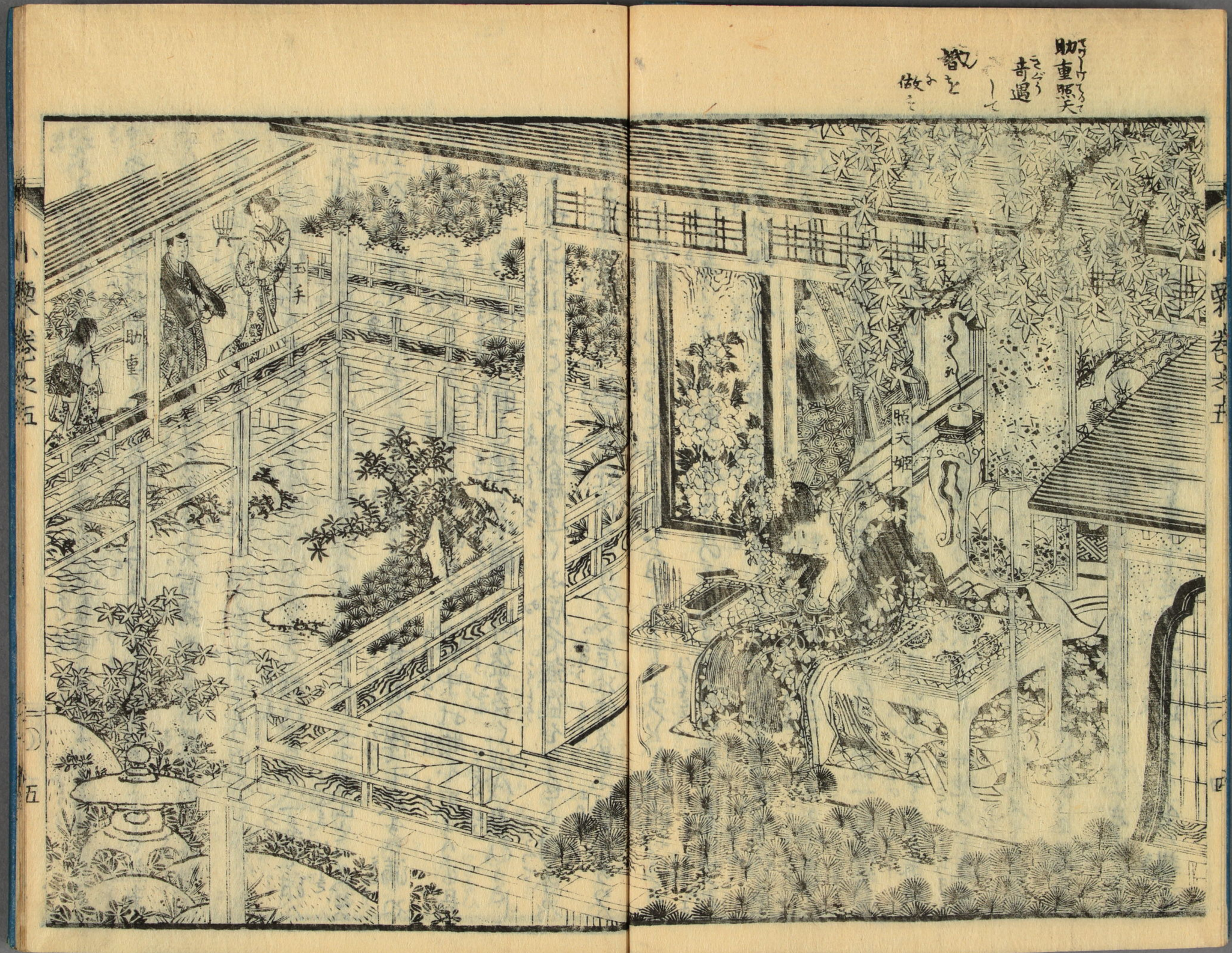
といふハ嫡男八太郎安経二男を次郎安春三男を三郎安武四男を四郎
安高五男を五郎安永といへり渾力量早業の悪徒にて。就中太郎安経
次郎安春の二人ハ姫君に執想し兄弟争ひて恋するにぞ。父の横山これを
見て心裡におもふやう。名武が家の子ともなるべき人を照天に配偶ハ家名
を再興しのぞんと漸く今のよし豫て一色のいひけることもありけるを
我児照天を恋するこそ幸なり。一人の子をめとらせ照天と夫婦とし名武の
家を再興さし旧領を復しなばさこそ楽しからんと想下たけ。姫君には親
子と斯と知らしければ。親子となりしからハ姫君とちうちう憂
ひにおぼし嫁がせまひと事とひ逃逗。一日とゝとゝまりしがそのうち
君にはわすりにこれを苦に病となり給ひ終にそのまゝ身まかりね。その後
姫君世にわびみなく。泪の乾くひまもなくおはしたる横山安秀殿多くに

尉の只厳我子と婚縁のことを勧むれど。姫は堅く辞まず。されども安秀さんまでも。密々に左郎安継をもて女婿にせんと。浅れば二郎安基を恐こ。爭とりて娶んとすれば。只妬みほとく闘爭にもあらびぬべう。えもろふ父の横山もこれを愁ひ。婚縁の沙汰は止まぬ。再ハあれど。終に我子のうち一人を照天に娶せ名武の家を押領せんと想。公頻にすれば。兎角に姫君の心ごとう。新婦にせんやといろくに憂恤。さ侍し。姫の宜ることをば何事にても。その云がまゝふくなるとしあれば。これ恩を負せて。其子と婚孫さそべて為ん。姫君はいまだ成猜し。性針の莚に坐するごとく。此うちふ君の在家を尋ね。此地方を逃れ出ずんとおぼせど。召使を美る人もなく。自ら出ずんハ深窓ハ生立まへハ世間のことハ東街西街ぞふ知しめさまへ。心に念ずふのみ。

ふでいと患ひ屈しまふ折ふ。姥鎌倉に所用ありてまゐりたふ。道を過失この処に吟呻ひ。此家に一夜の宿り求ねふ。其夜姫君の召前に召出。委くに事情ずふ。姥が身のうへのことゆへあげそべりぬ。既に召前を退出。臥所に入くに睡まつうんとするとこれ姫君忍ぶふ只一人。姥が枕辺にあり。奴家ハ助重君と許家あり。照天なり。汝ハ我まに由緒ある人なれば。夫れ在家を知りたらん。今ようひ密うに請引ぶさとぞ。と命ありしぞ。妻氣落城の後ハ召在家を知りなまふ。姥ハ甚そ申ありしに告まゐらしたれば。さあらば今ようり世西に居て。奴家に力添てよとくぎなりて命の乖ぶがくまふる。姫君に給事ぶ。名を玉手と召れ。至夜ハ側に侍りて。姥ハ心ふハ君の召在家ぞふ知ぶ。姫を供ひまゐふ。召夫婦の召対面ふ。

きんと。只顧君の風声を窮ふ折うら。不料ふ姫君。君が[illegible]ひ
されど。幼き成ゆえのみなるのみなるべ。人差のほども見東ゐ。
明白ゆ名家のものと。強て世家ゆ清引。姥をして其実否う試し。
君ゆてもつさべ[illegible]。此手紙の憂状告。知も用もつりのうん
ゆじめ。さめれ樗山どの。常く殿のるをゆ。ぬく忌嫌べ。害心を
懐んと必定なるべ。此処へ誘引まるゆしらほをゆ。安秀どのを色み
のつ。こまらのことを心ゆ食をゆひ。今夜蜜ゆ姫君ゆ[illegible]。
尚委き紙ゆ[illegible]せ。然れども只今もやをてく樗山どのへ[illegible]
ゆ人べ。今は新面のくんゆ然べうべ。後ゆ人くゆ聴ちゆまべ。晩
蜜ゆ案内しまゆくゆべと。故の別室ゆ送り出て。我子庄司ゆ對
面し。小栗ゆ文へしゆくまを述。ゆうくゆ今夜姫君をおとしまと

きそれとふ洲よく心を付て道の備をるべくと。よくゝ私語ゆんく。
姫の方へそきりょけて小栗の従ひこのと紙ゆ姫君の事ゆ兼て伊及
ぶり。今世処ゆ在ゆ紙知り。皆付も置ゆふゆべゆよゆ。奈何しそ
う付ひまゆふせんと経織區くなり。判官代助重宜ゆとゆ天下度し
ゆいと。我ゆ容膝の家ゆゆ。殊ゆ天を共ゆせぶゆの姫ゆ一色注秀と
いふのゆ。それを討んと世所ゆ来ゆら。一女子の為ゆ志氣紙
速うふせぶれゆ人の子ゆるの道ゆゆ。不如ゆ西く此地方ゆ立去
鎌倉ゆ赴て一色注秀を討くゆ父の仇羅を易うくせん人くゆその心
を知よゆしと。ゆへゆ庄司ゆ母玉ゆへ。時分ゆはとゆふゆ事ゆ。
助ゆを付んとゆ。小栗ゆ焼ゆ對ひ仇ゆの為ゆ鎌倉ゆ赴けゆ志ゆしも
由豫とぐて付ゆあゆ。ゆて本意ゆ遂目出度ゆ思ゆ。その付ゆ親と


助重照天
さぐり奇遇して
敵を
做す
助重
玉手
照天姫

我とは許しうれ妹脊を結ひそぐべ。世事姫よ文へよと。道理とうけそ
きと。ゆるしぶ姥咳嗽とにいふ。君知ろ一百まし一色の勢ひあることを執事
よりも尚增り。鎌倉中の往来をうふ。百騎ばかりの従者あり。其鼓の
光景は御所よ均しく。當直のりの数を知らぬ。知らぬ人を討人は鬼
神あれ。ろぐう十騎や十一騎はしていうそよく討るのうん一色を討人
とあぐきい窟竟のうれ。そは奈何ぞるひぞといふ横山と一人ぞ
無二の交あれば。忍びてとふ来ることあり。其後は十人まで満ね
佐人なり。その時を窺ひ途よりて討めうで。袋中は物を取よりも易
かるべし。一色と横山と睦きを絶たそ。今國く群盗多く。征伐及ひがたし
といふ。せど横山がことは。鎌倉近くに居て強盗をなせと討ずるの
向はざ所は正しく一色が洪庇ふよるりのう。危ふ鎌倉ふ赴きのうん

よく。此地方に忍びて。姫君とよく議り一人が来るを待て復仇を
と。誘められば。小栗少しく色動くふ。十人の豪傑ふも玉ぐ云ふ
はじまくと。只顧涙動ずせば助重実のと思ひ人くの誘よ従ひなり。
姥は喜びいざらば這裏よもてせよと助重を伴ひて。姫の閨よ誘引
なれば室内に入りて。その光景は多くは物数寄ふ匠まを
尽し美麗なるふ。空炬の華ふりなるひぶと清らふ勝
たる文机よ。姫はうちもたれ流く物想ひしるさまなるを。目今助重の
来るふらち敬ふ顧る光景は。眉は楊柳の翠を黛に新は芙蓉の
顔は姫まる。肌は雪ふ光を添ふ。あがとく。腰は綾衣束たるふ細り。
雲間を分て晴出る月よりも尚美く天然の姿色桃李も恥ぶ
あれよ比せんや。正足蓬莱宮裏の神仙よあ。ぶるぞ。かるぶぞ瑶臺

月下の仙女ゑんとちとぶ石心鐵肝なる助重も心魂天外に飛悦忽
ちて着とれとり。其府玉なる姫よ對ひこの年比郷しとあぐと殿乃
つとりの且ぶ。ゑよ念じ給ひ給れて。隈なく笑へのひて憂を慰え
ま人給と銚子土器とり出て。いざきとしめせと勧めれば。助重照天よ打
いひ。乃月に某とは。祝の免世妹脊ぶ。互の家の凶変よ絶ち
間とはなりにはど。姫の生死を知らぬ者ぶ。妻くの年の孫ぬ且ども。
他し女をぶ祝近ざれ。是我父の命をちんて。ゑん身を忘れざる所し
ちとふ今夜不図ゑと来ることと正よ是夫婦の縁れてざる證と
ちふん。されば婚姻とも。などる妨あるまじけ且で。縁てゆゑも及びのひ
ゑん。某父満重ハ一色俊秀ぶ諫よりて。君の心勘氣ぶ愛り。妻奉
の城ふおいて生害せり。然且ぶ父の仇ぶハ一色なり。今生一色ぶ討く。

父の仇羅を易うせんと。此所まで来りぬ。其ゑ迷はして。姫と
婚縁せんと孝ふあぐど。此道理を聴ゑれの人倫を復して后婚を
做も遅ゑ。某ゑ志氣の差ぐはふ前ふまりしぬ。化ゑ婚せ
ぶ者をりて察しの人と理を思ゑて今ゆれば。姫を小栗が子の所赤ゑ
ゑんて憐ふ女へゑれば且喜び且嘆ゑ。免角の回恵ぶ世きりしが想ひ
まゑ世ぶ横山安秀。明日ふも我子と婚縁させんと笑へゑぶいゑふせん
やと公苦しく。漫涙ふかきくはしが。術あって云生ゑれハ君は志氣
の程。まことふ嬉しとも悲しとも。言語ゑれハ述ゑれ。君と奴家が
妹脊の間ハふりてみ髪の比ゑりして親の汗世縁故ゑあるを父乃
横死ふ家亡び。母とゑふを夢幻と。嘆ゑ悲しむ。叔父なりけ
横山安秀。奴家祝ゑを使ひて。此地方に忍び居るうち。母の侍従を

憂てこの。かさねの嘆きの病となり。なほ世の人となりまひね此事をば玉まが物語りて。知らしめ〜まひたく〜ん。叔父横山公亜相〜ね人々〜。奴家がりてその子れ妻は。名武が家を再興せんと只顧勧めねるとど。君をおきて他男はこんくんや。死を拒ひて辞〜わども斯ごとく獨枕を守りて。節を失はざるとど。明日にもあれ強く婚縁せんといわるぞかるべく。無よ伏く命を縮んり〜けることも付りあば。懐まとあば〜斬〜〜。回向をなしてのうれと。涙ばらはら笑へくれ玉をすくみ生てまうとなり。姫君のひんをでは彩のごし。殿はけ公一ッあで。姫君の御命をいうはとも知りのうん。り姫君の恋の上。過失あらぬ過〜まうぶ。父君の黄泉あて。喜びまうふとあばとやよく〜おばしまてのくとかき口説けく。やへられ。判官代助重。姫の心ぐく懐れまうふ。

玉まがいふ処道理あるべ。さてとば難面もなーばく。中あらて云出ろう。姫の志まといひ。姥が孫の道理あるべ。姫の望と辞めあ〜ば。偽と穀うれ其前よ。婚姻せんハ嫁婦僕夫の誹謗あり。是と恐れて前のいく〜つるし。然るふ横山強婚せば。姫死〜まうとい〜ば我明日明白よ姫を迎んと横山ハ云送〜ば。蘇ての許嫁あれば。よも辞〜ん〜ま。此ろいふ〜ひのふとあり。るれふ玉まを首をうちふり。そハ道理よおいてそ小白なれど。前ハ前ハ〜ど。横山と一色と豫く祝〜ル交りあれふ。且て安秀君を姫〜ろふなれば。用ま〜まろ。速ま一色と示合せていろ〜ん。謀ろ〜ま〜伝〜ん。されば他を穀ゆるとんさてあれ。ハ分の上いと危〜し。且僕夫婦の誹謗あり。と。宣とそ心ろ孫。今新ふ婚を求めるまま。めるべ既ふ釈くれ許まくほれ夫婦ろ。睦を結ぶひるまふとい〜ぞ

婬行なりとなさん。たゞ姫君と密議をこらし一色が計謀を做たまふこそ
賢なれ尚足ても申して聴しめさぬぞのや夫大功は細瑾を顧ずとかく
たけさかる些なる事にかゝはらば不孝の汚名後世に遺しなまし
沐猴と縁めば位に仕へ説は助重道理に伏せられて我過を免して
とゞめに姫の喜びはさらにもいはず玉手がよろこび譬んかたもなく。
眼をさらさば姫君この年ごろの憂を忍びまゐらせしも。君のこゝろざし
まことにせちに感ぜさせまいらす。甚甲斐ありて今日目今奴見へまゐらす
こと。日比念じまゐらす観音菩薩と満重が崇むる先祖の霊の交付なる
と想へばいとゞうれしく嬉しさかぎりなき目出度時附に賤のおだまき採
かくも長物語は後にし日比の思ひを語る日にこそ心とらちもとする
夫と戯も姉と一間と退けば助重は姫の手をとり。紅閨に入れば照天

姫は嬉しと想ひの我妻に今夜逢ふの嬉しさ心ときめきせんにしく。
都にも稀なるあげぞ忍ぶ目に夫の容貌を窺ふに雄偉美丈夫なりけり。
紅裡にそだちし世に女子も多かるに。かゝる美丈夫を夫に持て景福
いかばかり我身の幸とよろこび喜び縁は鴛鴦の襖うち被ぎ巫山の夢
を結ぶとされば八声の雞にうち驚かされ。玉手が聲して山本の
神にまうでしとも。皆人はかりありしぞの人と小栗を誘引めとの別室に送
かくらされば十人の侍臣もを待うけて助重に對し一色を討べき謀あるやと
問ふに助重別に数ある術はなし。只玉手が思ひしより外あるべからずとあり
ちかふにもさらば一色が専を待て本意を遂なんと鎌倉に赴くこと
止まり。此邊の旅宿はせばやと明日は横山が家を立出そこに世を
徘徊さるべき家やあると需しに。こゝに吉郎といふものあり。その家　又

庵を作りて旅宿さぐるよ堪さうれば。主従とも旅宿して一色はよまる波
待さうれさぐ世処のものは。横山が部下の山賊ゆして邇近世ろわ
迷ひまるものを切害して其財宝を奪つてく今小栗主従へ陸奥
方の商人と偽りしうど。吉郎十一人の光景波窺ふ。傭人ふ豪傑
かなるぞ足かるふ東国方あそよ武士の世波忍ぶ人くあくん
ぎくんとぞくぶ。みぐりわくまを下して。害とともなりかく。皆射その
動静波窺ひ。小栗ふ穏て照天姫と示一合ふとあへば毎秋
人の寂静ふれを伺ひ。姫のりとに通ひろう。吉郎ハ涼く心付ふこと
なれば。助寺の照天姫のりとふ通ふを知う。蜜ふ邪と横山ふ告げ
ありしうぶ。安秀大ふよ怒り。照天の婦人我子と忌嫌蜜夫とうしろ
とそ中をうふ。そもいろる人ぞよくくれさぐと俄ふ照天の姫乃

了髪を石捕強く掬問ふ。彼了髪呵責の厳きふ堪くと助を姫
まりしとよう。夜毎忍び来るものを詳ふ白状ふ及び一ふ安秀扱ふ
彼蜜夫とそ。小栗助重に必定せう。速ふ彼を討ふんと記ふ紀乃彩色。
吉郎涼ふ扱ふ某熟く彼们ふ従の絲波窺ふ尋常の人とも
おぼえと又豫て小栗主従のりとやくふ。ふれも絶世ふ豪傑なる
はし人数を催し討ふんと世ふ我くぶ方ふも害せ〜ふくりの多ふ扱べ。
其上全く討ふんとも。ふ扱ふ難ふ謀をりて討ふ志ふ。速ふ是ば。
安秀実りとまりとふ奈何謀を用ふと評議ふる処ふ。吉郎安武進
出て申ふ。これ涼く患ふるとふ。父が耳ふ口波よ〜何とと
申ふ私ふ横山ふを拍て大ふ喜び。千金の謀なりと。千羽五日
横山安秀自ふ吉郎ふ許ふ赴波ふ豫て示一合ふとふれば。

主吉郎横山を助重が居る次の間に請ぜ入酒宴を催し多く興じる。酒既に闌に及び〻時横山ひそく酒に醉さる体にて端居せばやと暇失く。助重が居る隔の紙門を開け助重と間なく面と逢ひたり。横山懷然るおりもあれば小栗を云ふ。はぐかへうなれば助重なれば此と知るひさるさ思ひて珍しく小栗殿何故こゝまで出でたるぞと云ひけれて。助重不審眉に寄めて横山と。先着つ角着つして又驚て爾宣云をこゝ。横山殿あてはまりたるこゝ思ひうけ言さして驚かもとゞもなりけり。甚だ横山云へりけれ某妹婚名武馬光様死の后妹縁結と照天と云某佳ひ退く。此地方に忍び居るうち照天中成長されば嫁く許嫁あれば足下のもとへ送らんとは存ぜれど持氏公の。は不審と驚しりの女児なれば昔とは居ひ。今は奈何ぞと女〻ん。足下狐子の幼根を問ひやとゞふうちに妹縁は不図も世を亡き人となり。仮足下足彼の事はまぎれ一日〻〻とるうち。足下満重殿のはあ氣を蒙りのふは。はくらけのあるふ。こゝ志ーそうと想ひ惑ひ付れが。熟〻とくそかは時人の信ん知るものを。何國に忍ひあくとも義遂て姫と婚姻さんぐ所く方〻と捜索ぐしとさらに甚行悲と知ぐ。今日不意此所に對面なーはること過世の契深さ逃るく。いざやありしふ我家に帰して前の約と全ふーのくと実のんに小栗は横山のあるふ信ずるなることとはこのるふ深く疑ひ危角の回意なく。さしうふひて居くりしふ漸あつて云出ぐ所の宜つとおらく。夕の一殺気に受るのこゝろ。家さん亡びぬれば。いんそれとも楽みを空〻路頭に餓死とる。結局の果のとる形きを。懐土とおぼ〻古は好者と今に捨ぐ厚た

あつと垂るふ。意ぢくこそ嬉しくそれ。明日きは館よりあり感謝のぐ
ちまくんと申さば。横山殿び。然らば明日こそ。我家ふ行でこそ。いへ必ず
待まるべくとこと云つ主吉郎よ對ひ汝明日此客人と我家よ使ひな
ると懇ふ仕へ垂小栗ふ別と告てなり去り。小栗ふ十人の仕臣紙
保會蜜に云へりくはふ我く主従忍ぶとこと知ふ。横山ふも知り
ぬることの不思議なり。彼とは素より心よりくは間なるふ今のおとく
懇ふ為ることを云笑ゆることそ。ふを知ぎれ。足るべくふ縁故あるふこそ。
さあれは彼が館ふ往いと危うべけれど。往ざる時は臆ーとるんど
いつまんそと私念の事こ横山何程のものぞ。儆ん。明日彼が館よ往て。
儆ん。ものと着べとあるふ。十人の従臣ふ一般ふいふ横山が館ふ赴ぐ
べくふ。支へとおとめふ。ふどど。彼ふ何なる謀をなー置んも知ぐれば。

今夜蜜ふ姫君ふ遭ひ横山が隠謀紙笑ひ人しと誅ぶ助重実
りと肯ひ其夜蜜ふ照天のりとふ忍び行通ひ則ふは城垣の崩より。
忍び入くんとふふ人妻く集ふそち衛居ぶれば入べくもなく空
ちく旅宿よ立戻り。十人の人くふ對ひ事の辞ふくを物語れば加茂
知左郎弁ぶ出て申くは横山既よ。殿の姫君のひと人通人まふ
ことを知り。番兵と置くこと紙防ぐ。蜜計を知ふ志ぶとされなくん。
ちく成りて想ふふ明日横山が館ふ赴ぐふ紙出りふ人彼かるふ
兵を伏く。君を討ぶ事くんと謀るべくー人くふふ想ひふとあるふ。
渾一般ふ加茂の申さくこと露差ふ。ぶれば君ふくー戒心ふるべ必
虎穴ふ入ずんば兎角ふ往ずんばはよ如ぶと誅ぶれ助重首を傾け志ば
沈吟ーて志るが御ふて云くらく加左郎が答ふるる処大くふ差ド

小栗助直
手人特臣
道仏
遭ふ

助直

然れども我が十人の豪傑あり。彼の烏合の盗賊なり。いかに猛しとも恐るゝに足らず。明日速に樸山が籠を乗り。其附宜よろしく樸山一家を生捕ば敵一色絵奏とゝ。我が助くべしと怨然として父の言葉に従ひ。再び誘ひ来りて終に其命を失ひしなり。嗚呼小栗助重智謀勇畧あまり有ふして樸山と慢り。加茂が誘を聴き。樸山が籠に至り。終にその謀計に當られ呂義の厄難をかこちたる小人とゝて慢べらるべし。古人の俗言宜なるかな。斯てその翌日にありしが。小栗判官代助重吳しく狂ひ十人の豪傑が太刀衣服に至るまで善くして助重に陪従樸山が籠に乗れば。彼方にも嫌て其俗侍やうの門迎に盛砂して清らかに掃除して待受ける。小栗既に其門迎に到れば。家長めいたる漢子出むかへ正堂に伴ひ烟茶の饗をなす。主樸山五人の子供と一俱に出て對面し。我子を一人助重に。十人の侍臣に樸山乃人ふふ入じる。其後樸山佳酒美肴をもて饗をなす。さて樸山の云ふ。昨日伊勢へ参詣して今日照天氏足下に逢ひ。彼を今父も母もなく親となるべきものは我不肖のみとして。照天が叔父なれば仮に我女児として給へる。されば翁婿改めての見えなるべし。出物なりもいかゞ。左郎幼る。今浪を鏤へ鞍泡を小栗が前へさし居る。これ偽のごとく取り出し品ゆゑ。賀に出るべし。我まこと女婿よりしての引出物に望まるゝ。少なれば助重を鞍泡とあり。裁に感謝を述て后に中。我が旅中とて父の擯斥を訴へ既に年経たれば。一物の賜をしさりあらば物なきもいかゞ。そもいかゞ

物の望ミあるといへバ横山うち笑ひ。近日子供が得たりし馬のあるが。あまりの
荒馬なれバ家ふ嫌ひぞ後園の郊辺ふ繫ぎ置たり。其馬ふこの鞍おひて
一馬場乗てみせよ。これふ上こそ引出物のあるじとやまさるふ助重心の裡
ふハ此馬こそ故あると爾とども馬ふぐるなあれなるが。かれふ乗ざらんや。
とうち笑ひつゝ回意のほどこのほどよい易れてゐふそくぞ。其馬繫ぎたるま
える方ふ案内してまゐらじとてもなげふこぞりけれバ。横山喜ひ三郎や
を。案内しはなぜよとあるふ三郎安武いぎあ人とて前ふすゝめバ。
小栗判官代助重十人の郎黨を引倶し。安武が殿ふつひて前栽ふ出たり。
歩こと三丁あまりふして一箇の门を出れバ。此方ハ郊原なり。此時候
九月の末なれバ。秋霧朦朧と四方ふたちこめ。ありふ枯残る荻や薄
の風ふ音をそへ。悽ふさまじく笑へり。此時三郎安武遙ふ指さして。

對ひなるかの細流ふ添ける森ふこそ彼馬を繫ぎ置し。彼所
までも案内しまゐらすべけれど。馬場のゆうけともせんずまでとて。あるじ
より人ゐ彼所へおくらせよと云ける。慌忙けふ走り去ね。小栗主従目と
目を見合し。三郎が案内するさま心を得ざれども。早ふ此馬子細ぞあらん
かるふほどによりてよとありけるふ人々ハ命までものかハ此所ふ望んでいる
く不覚をとり侍らんと互ふこゝろを励しつ。生茂りたる萱野を分て
なぐらり行既ふ厩近くなるよ秋風の淒然と吹おろれ。千草ふすだく
虫の音のそれならぬ哀しげふ聞ゆるのこそありけり。主従四方
を顧望耳をそばだて。熟く聞けバ。正しく人の呻く声ありて。これ何
と其声を知る人ふ歩行ま漸く呻声の近くなるふ。其辺ふ白骨累々と
として砂石のごとし。主従これを見て怪しさかぎりなく。こゝ斬罪され

場あやとゝ丈あまる萱おーこけて四方をこるゐ死して幾日もうゐね
とおゐーれゐ。筆ゑ散せほうゐごとくまろび居うゐ。それゐ中ゐ三ゐ小ま
に郷められー。六十あまりの漢子ゐりいと痩摩く。顔色炭のごく
黒みうゑれゐ若ーげゐ呻れ居れゐ。助重これゑこん池庄司ーて生縁故
を問へーしゐ彼漁子ゐ苦ーき息ゑ衝くまうしゐはゐ我ゑ問ゐーまゐ
方を。奈何ゐる人ゐくはゆゑんといゑ。庄司今此ゐゐ洗ゐうゑて
あゐゐ。小栗判官代助をう従ゐう。泓ゐ舟の上ゐりてゐゐ郷めゐれ
ばゐゐを語ゐ少と。ゐれゐ彼漢子いと強ゐひゐは風情ゐて首ゑ
ゐうゑ。助をを着一着てゆをまう。君ゐ某をゑ知ゐーゐをゑ人ゐれと
糸を君ゑよく知まゐ。斯ゐ。ゐ明ゐゐうゐとゐりゐゐ名武ゐる光の下僕ゐ道助
とゆーを若ゐあてはゐりね。前年ゐ人ゐ篁光相模川ゐを模死ゐゐ物ゐ某

供ゐてゐひはゐゐ。さても主人ゐ篁光の水死を模山ゐ正ゐゐゆてゐゐゐ。
其ゐ付ゐてゐ爾ゐゐゐくゐひきと篁光模死ゐ付ゐ光景を詳らゐゐ。
某もゐ付ゐ川ゐうち辺れゐほを幸ひゐ水心ゑ沉ゐれゐ。水中ゐうち
こまれゐれとゐまゐ。水ゐ底ゑ沈ゐ。幸ひて命助ゐゐ。主ゐ死を
をゐんゐごゐのゐく館ゐ還ゐゐ。子ゐ分疏をがゐく。生国武蔵ゐ国
金澤ゐれゐ。彼正ゐゐ退忍び居ゐうち忽ち主家亡び内君も非君
もゐ行衛を知ゐざれゐいと足赴ゐおゐ人ゐも。在家知れ紛ゐ詮をゐ
形ゐ。弊ゐ付故郷ゐゐりをゐ。熟ゐく想ゐを下郎ゐゐ云ゐごゐうゐ。
知を目のゐゐゐ。ゐこゐゐのまく止ゐをゐゐ。せゐてゐ紛ゐ敬ゐ模山ゐと。
内君や姫君ゐ告まゐくせんと。故郷をゐく正ゐく方ゐ。主ゐゐゐく人ゐ
尋ゐ紛巡ゐ足ゐ。かゐゐゐ知れ紛ゐ。一ゐまゐ故ゐゐ還ゐんと此地方ゐまゐしゐ。

不図横山よ出会。この光景ゑハなりそぐりね。那てハ死さるゑ行ハあゞ。
今日ゆの幸う君ゑ見ゑ出さるゑを好ゑう君ハ正〜く照天姫の女婿
わゝ〜ワうふせゑうべ。姫君よ還会ゑうふとれ某ゞ今日の云ゆ告ゑうひ。
ゆ夫婦うて仇人横山と討ゑひ。爲光君の修羅の巳云合と晴〜ゑ。
と説話ハ小栗ゑ従そゞめて。横山ゞ久〜武を害せ〜ことゑ知り道助ゞ
健氣の志ゑ知賞〜。主従此地よゑ出ることをそゞめと。照天姫ゑ
遭はること。横山此野よ繋ゑ置ゑ馬ゑ乗れとハひ〜ことゑ。ちもなく
詳よ笑へ。その馬いうる縁故ゑりや。汝知ふゞ語りゑ之ゑとめるゑ道ゑ
回遠ゑ知ハ某此所ゑ郷ら見ゑ付。前よ某ゞ必ゑりゑゑり。彼者語ゑ之
ハ。我〜ゞごとくゑゑ郷ゑ垂人ゑゞ。此野ゑ繋ゑおく。鬼駒とゑる馬ゑ
絆ゑとる。彼馬ハ下総の小金ゑて生ゑ〜駒ゑ。奇代の逸物なれゞ。

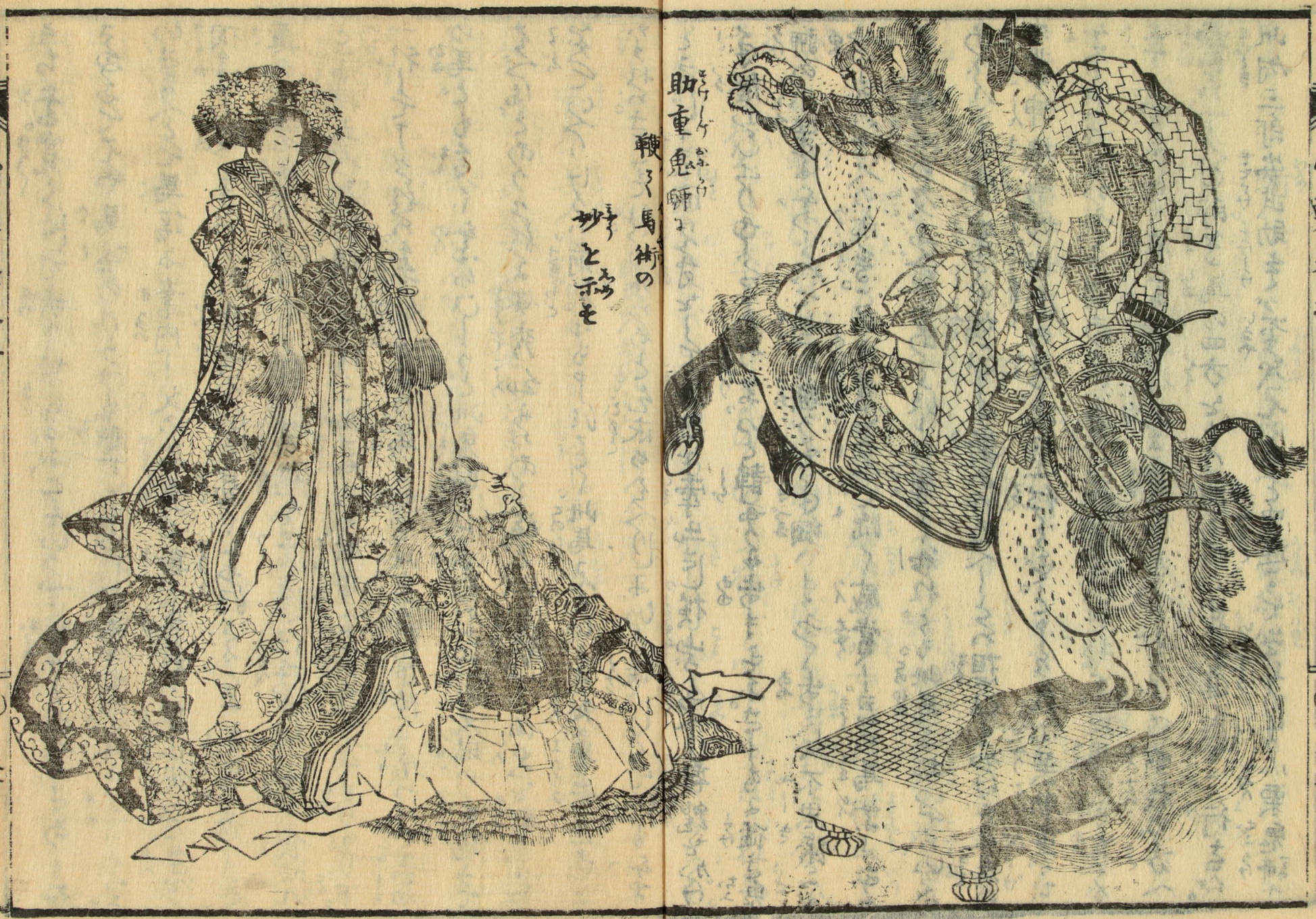
下総国守より鎌倉度へなんとゑるゞ牽ゑ引ゑ横山安秀伴ゑ笑道
よ結ゑ付ゑ。横山一家の行ゑ此馬ゑ求ゑるゑゑ。彼者人と
結て。賣渡さんとゑれど其人を好ゑ。空〜繋ゑ置ゑ。不用馬
なれゞよくも餌飼せゞ馬の口ゑ足沢憤りてゑ。旅の馬よ絆ゑ舎人
の寝ゑゞ。花ゑうて食ひ殺〜ゑるゞ。これより人と足ゑ食ひゑる行ゑ
那てハ一ッ厩よハ繋ゑぐべうふゞと。此野の中ゑ堅固なる厩を営ゑ足ゑ
ゑるゞ置ゑ。横山ハ盗人の大将軍なれゞ大勢連ゑ旅人の物ゑん
とゑれ。那ハ此馬と狩出て。逐ゑ殺ゑる。其後ゑ乗ゑて荷物沢奪ひ
又捉へ来ゑる旅人ゑゞ。某ゞ〜ゑて馬よ食〜ゑ。那ゞゑり猛沢荒馬
なれゞ。維いゑとなく。鬼駒とハ呼名せゑりとゑ。今君ゑ〜て。此鬼駒よ乗ゑ
ゑうべとゑるゞ荒馬よ食〜ゑんゑるゑうべ。相かまへてよく戒ゑ。

といと苦しげな物語絶よも已くなりけるに。小栗ハ道助があへかれ最
期を憐みしばらく言葉ハなかりしが物語を熟く考へぞかくらにて忽ち嘲り
笑て云へりけるハ嗚呼愚なる安秀かな我総角の其むかし名武が館ゟ
おゐて彼と弓法の手がね論じそろりしハ我上ゟ出ること能はず其時より
志て我を憎み懐うりされバ今不図此所よ来るを幸ひに昔の怨を
報んとせしはかるべし思ひまうせバ横山ハ舅の敵家の仇なすならバ
此老賊を殺さでやかとはおもひけれバ池庄司と初め風間田辺義登の們輩
を括り腕を磨して悪き横山が行状かね命のごとく早くこの老賊を除き
。まんと存りかくはを加羨兄弟これを止め君をはじめ人これ懐りハさる
ことながら君ハ天を倶にせざるの仇ありそれとも紺を私の仇を先ゟ
志のふハ是何の道理ぞや今横山が光景を窺ふに其部下已ゟ多し。

若過失あらバ一色どの誰か涜て大殿の修羅を安んじまゐらせん太刀の
前の小車く奚胤の為に千金の弩ハ発せんとのやさんやかと諫まぞ
小栗此諫を聴くからや甚憤をおさめけり。爾あれ一旦横山よ鬼駢
ゑんと約をなせバ。此車毎むべれにあらむと再び草紙かみかえして厩乃
前に到りて其光景をみるに太柱かねたる柱を蜘蛛手十文字にくみ足を
大蟷螂の群めて打はけたり。秣飼所ともぼしく絶に人の出入を隔てたりの
扉あり。堅く貫木を鎖せり。蜘手の隙より裡を窺ふに八寸ばかりとえ
ゆ体太く逞しき駢なる馬あり。鬉も髭ざれバ生かぶさりて額も定
かならねど眼まるどく晃として乱し鬉の隙より人をつんさるさまに
閃として電光のごとし。尾ハ長くして身丈にあまれり。太き鉄の鎖を以
四方へ引はり繋ぎたれバ只今人を見るを見て例の人禄なるとえひ。

まくうちして嘶げさーも丈夫ふかまくうれ厩揺動てうりうれあて。
小栗これを着て天晴良馬うれ。ころ幽王の八駿頂羽が騅ふも拔くね
るー。たとえ於ゆもあれ。鑣のそげる行のり。ふ拔さるこやおうべきと。
既ふ手ふんとて於を。賀茂次郎を。みぬ君ふあんて。此馬ふ拔うみわ
ざ於ふあうあう拔ど。知る異うる馬ふかうぐしく。ふまうしふ。ふまうも
過失あうぶ。悔ひてかくうね事ふり。不如ふば。ーー歩うのくと。流ぎぶ。助重
改を左右りうちふり。否微ぶ。諫さうとうぐら。横山我と立んと。此馬の
力を借る。り事拔ざ拔とうて。當座の恥辱を少ふなれと。横山ふ
拔ざ於を罪とし。いうふる謀ふ用んも知るべうふぶ。そも馬ハ言ふ於肩ふし。
幸ふよ行をりて天下と利とるりのし。いうふ猛ーとふふとも素これ馬
うれぶ。いうで人とふあせとといふとあうん少ーも。ふ悩ふとべうとど。

と云はく。風間兄弟をして鬼駒と牽出さし。横山ぶ。ふくーー鞍鎧をかけ
手綱かひくりゆうとと打。ふいと。静ふ歩ふまとふ。さーもよ猛き鬼
駒の。小栗ふ。ふくれて此二も騒ぶとふ。綱ーまうあく。歩ふしふ不思議ふも
怪ーふれ。十人の郎等。この光景をうんて。ふく感賞ー。君の馬ふ。ふふ
とふ傭人の及ぶべ於ふあうぶとふ。豫て知れども。此馬ふ。おいくうふいうふ
あうんとうらんと。案うの頃ひーふ。斯あうぬぐーとふ想ひもかけぶふ。君の
業神機微妙。我們の及ぶべ於ふ。ふくぶとやうふ於。小栗助重ふ
笑ふて。我もかうどふあうぶとふ。ひたうふ。いとふぶーーふ馬ふく有うる
事よ。いうやとく庭ふーて。横山ふ鼻あうぶぐーとうとの前栽の方へ
赴ぶ。十人の郎等。馬の四方をとうう囲ふとふーー道を分け行ぶ。
此所三郎安武助重ぶ不平於ふんとやと中途ふて。出ふりしぶ。小栗鬼駒ふ


助重鬼師
鞭ろく馬術の
妙を示す

うち寄ふ寛くとして歩ませ頭ふこそいうふと猛るくとしくどさあくねさあ
さあて。それや馬場のりうけも整ひたべれば。足まうでは近ふ寄くくる。
いざのくとて馬場ふ案内し。父の安秀ふ斯と生れば撲山安秀ふ答ふ
相道し。頼こまくふ鬼駒を。いと易く乗りくること不思議なり。
再あれ素鬼駒ふあふ格が。其術を見さし。仕授さして馬ふ食せん
と子供五人紙引俱し。馬場ふ出ふれば助重安秀紙こんてるるうう下。
一礼してやくふ。乗初きよう馬を好ふ此手ふ常陸ふ居つれば。実筋
の馬ども多く乗ひしうど。此鬼駒がごとなくのつば。天晴の良馬ふて
たべふとありくふ。安秀ふ格どいと喜びふ乗しうち
笑ていくりけふ前刻ふもやはこと。此馬ふ乗りくる知ふ尋常ふあと
なれふさこて紐のりめと乞求めたべりしふいと猛しくて誰も乗
紙ど空しく厩ふ繋ぎもれりひけるふ。足下斯ごう容易ふふ
こと。實ふ其人を得ることやはべり。足此馬の紐ともこくべ。天晴
足下ふ馬道の聖人ふ。ぞあることなれ。めれ此馬ふて世ふやと碁盤
ふ将子乗してこせひふんやと乞れが。小栗心裡彼我ふ難事
を云うけ。蹴失させん講ふり。悪さも悪しと念じ法。完示と打笑こ
某勇る武ふのこふ果まで仕まくふ格ど。撲山度の坐ふのこひげふ
せんの風情ふ。ふ授じふ兎し紐くと回意くふれ。安秀ふ逆ふる事引
寄ふ堪くふと。ふ代ふふうち對ひ。早く備仕まくれと下知ふれ。
心得めと回意して立去くはふ。碁盤とを携人出。馬場ふ中
央ふさしふ。小栗ふおくふ格ど。将子ふ碁盤とを携人出。馬場ふ中
将子拾いへと云後下。兼りねと池庄司佐と出て二人ふあくれ将子紙。

のと呼び押建てて。馬場の東詰ふ押建てう。其光景仁王を造り換じゝあがごとく。勇ましゝもそゝりたる。小栗そこ立こんて鬼駒ふうち乘ふ馬場を西さゝゝ静ふ歩ませる沼の西詰ゝて。三四回輪乘ふ式ゝ。一鞭響よと着へゝゝ馬ハ平身ふゝり東ゝ出して地生ゝう。其迅こと矢ゝうふ。庄司助長が持ふ桜子を走せ昇ることたゞ平地を行ゝごとし。めゝや庄司桜子を持ふ堪はと着ゆ此ハも動ゝと地より生生ゝるゝごとく。庄司が顔色変ゝることなく小栗を馬ゝ撓指ふ乘り上ゝ手綱をゆゝ扇を使ふて暫休ふし静ゝと乘下せゝ。この光景を人居ゝる程のゝ小栗が馬術庄司が勇力世ふも少なゝ程事なれゝ喚然として歎賞せゝり。樓山ハ小栗主従が武威をこゝ心裡ふゝ驚ゝ紛ゝ我力とゝて討ゝこと難ゝ思ゝど尚鬼駒を乘ゝ想へゝ。小栗がゝる術助長が勇力と賞ゝ再び碁盤乘ふのゝこゝ望ゝ助重辞まゝどして又鬼駒を歩ませ碁盤のゝとふ近ゝゝふ。盤の上へ馬の四足を上せゝ。盤中にあゝゝる沼ゝ小栗手綱をかゝりて馬ゝ躍ゝせゝ乘ふたゝ跡の蹄のこゝ盤の上ふをゝめゝり。三回まゝで盤の四方ゝ乘ふ廻ゝゝり。其光景人間業ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝ物の人ゝゝ舌ゝ巻。賞讃せゝふゝゝゝ。

小栗外傳巻之五終